

全国の野外博物館の展示構成に関する研究

A Study on the Exhibit Compositions in Open-Air Museum

工学院大学 建築学部 教授 大内田 史郎

（研究計画ないし研究手法の概略）

本研究の着想に至るには「旧帝国ホテルの解体から移築に関する研究」（2017年度採択課題）が根底にある。旧帝国ホテルの中央玄関は博物館明治村に移築されたが、この移築に際しては「様式保存」という概念が適用されており、現行法規への適応などの理由から目に見えない箇所では改変が行われたこと等が判明した。この特異とも思える概念は日本の建築保存の理念を再検証する上で示唆に富む事例であり、なかでも展示する側の論理が多分に影響しているのではないかと捉え、さらに俯瞰する研究が必要だと考えた。

一方、我が国における歴史的建造物の移築は、法隆寺伝法堂や唐招提寺講堂のように多数見受けられ、移築という行為を用いて建物を使い続けてきた過去がある。近代に入り移築の意味合いは変化し、歴史的建造物の破壊を危惧した今和次郎らによって民家研究が進められた。今は渋沢恵三らとスカンセン野外博物館を見学し、これらをきっかけとして建築博物館構想が持ち上がり武蔵野郷土館として民家を収集したことも時代の証左であると言える。

このような中で、本研究では博物館明治村を含む全国の野外博物館を対象として、建物単体の移築そのものを取り上げるのではなく、各施設の建物と外部空間による展示構成に着目して調査を行い、各施設の特徴や変遷を整理しながら、我が国の建築保存の理念がいかに形成されてきたかの一端を探ることとした。具体的には、「全国文化財集落施設協議会」に加盟している12施設（2018年現在、概要一覧は表1の通り）の野外博物館を対象として、まず現地調査及び資料調査により各施設の配置図（図1は日本民家集落博物館の例）の作成を行い、各々の建物がどのように関連付けられて配置されているのか、また外部空間がどのように形成されているのかについて整理した。そして、各施設の管理者へのヒアリング調査等によって移築建物の諸元をリスト化し、施設の開園から現在に至るまでの経緯や変遷について調査するとともに、各々の建物の配置やそれらをつなぐ外部空間のゾーニングを分析し、どのように展示構成がなされているのか考察を行った。

（実験調査によって得られた新しい知見）

■ 調査結果

前述した通り各施設の建物と外部空間の構成に着目して、開園に至る経緯と今日までの変遷、現状における配置計画や外部空間の形成（敷地の特性やゾーニングの考え方）について以下の通り開園順にまとめた。

① 三溪園（神奈川県横浜市）

生糸貿易により財を成した実業家・原三溪(1868-1939)のコレクションを発端とした施設で、1906年に神奈川県横浜市の本牧に広がる広大な敷地に開園した。敷地の中央には大池

が設けられており、大池を取り囲むようにして現在は 17 棟の歴史的な建築によって構成されているが、そのうち移築された建物は 11 棟、現地に新築された建物は 6 棟である。園内は開園当初から公開されていた外苑と原三溪のプライベートなエリアだった内苑に分けてゾーニングされており、内苑が公開されたのは 1958 年からである。開園当初は鶴翔閣（1902 年新築）と天瑞寺寿塔覆堂（1905 年移築）の 2 棟のみであったが、その後に 8 棟の移築と 4 棟の新築が行われ、1922 年に当時の全体計画として 14 棟（移築 9 棟・新築 5 棟）の状態で作成された。太平洋戦争中の空襲によって被害を受け、戦後はしばらく閉園の状態が続いていたが、1954 年に開園が再開され、1958 年には当初は非公開であった内苑の公開も開始されることとなった。さらに、矢筈原家住宅（1960 年移築）・林洞庵（1970 年新築）・燈明堂本堂（1987 年移築）の 3 棟が外苑に建てられ、1989 年には原三溪に関する資料や収集品を展示する三溪記念館が開館し現在の状態となり、2007 年には国の名勝に指定されている。

② 日本民家集落博物館（大阪府豊中市）

前述した三溪園は原三溪のコレクションによる私的な特殊事例であることから、複数の建物を移築して公開する公的な野外博物館の国内第一号であると考えられ、1956 年に関西電力が豊中市へ寄贈した合掌造りの飛騨白川の民家（大井家住宅）が移築（当初は「豊中市立民俗館」として公開されていた）されたのをきっかけとして、1960 年に大阪府豊中市の服部緑地の一角に開園した。13 棟（うち民家は 7 棟）の歴史的な建築物で構成されており、北は南部の曲家（藤原家住宅）から南は奄美大島の高倉まで全国各地から移築されているのが特徴である。開園当時は飛騨白川の民家に加えて、奄美大島の高倉・日向椎葉の民家（椎葉家住宅）・河内布施の長屋門を加えた 4 棟のみで構成されていて現在の敷地内の西側約半分の規模であったが、その後直ぐに 7 棟が移築されて 1964 年に当時の全体計画として 11 棟の状態で作成している。さらに 1979 年に堺の風車、2005 年に北河内の茶室が移築されて現在に至っているが、特に地域毎に建物を集約するようなゾーニングはなされていない。

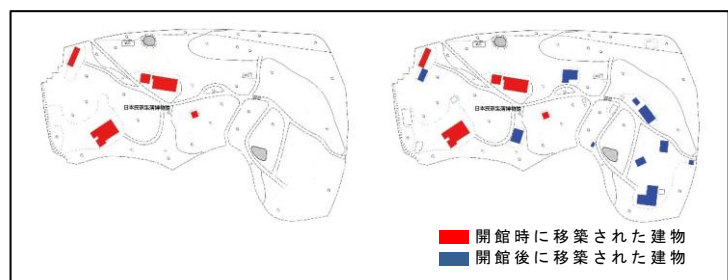


図 1 日本民家集落博物館の配置図（左：開館時、右：現在）

③ 博物館明治村（愛知県犬山市）

建築家の谷口吉郎（初代館長）と旧制第四高等学校の同窓だった土川元夫（当時は名古屋鉄道(株)副社長）によって 1960 年頃に構想され、主に明治期に建設された歴史的価値の高い建物を移築保存する目的で 1965 年に開村する。開村当時は 15 棟のみであったが、開村から 3 年後の 1968 年（明治 100 年の節目の年）に敷地が当初の約 50 万㎡から約 100 万㎡に拡大（鉄道寮新橋工場を含めた北側が拡大された範囲）された。その後も建物の移築が随時行われており、2007 年に芝川又右衛門邸が移築されたのが最後で現在の状態（全 64 棟）になっている。移築する建物の種別に大きな偏りはなく、広大な敷地に全国から移築された様々な建物が展示されていることが特徴で、広大な規模の村内は 1 丁目から 5 丁目まで 5 つのゾーンに分けられており、それらを市電・SL・バスといった乗り物で巡ることが出来る。

④ 川崎市立日本民家園（神奈川県川崎市）

川崎市北部に広がる生田緑地丘陵の一部を利用し 1967 年に開園し、民家に特化して東日本エリアから収集して展示が行なわれている。開園に際しては川崎市内の伊藤家住宅を移築することがきっかけであり、昭和 40 年代の民家の急激な減少も開園の一端となっている。開園当時は、伊藤家住宅・清宮家住宅・野原家住宅の 3 棟のみであったが、当初から神奈川県内や関東とその周辺の民家を移築復元することが構想され、それが実現して、現在では東日本を中心に 25 棟の民家が移築復元なされている。園内は正門側から宿場・信越の村・関東の村・神奈川の村・東北の村の 5 つに分けてゾーニングされているが、それぞれの建物の独立性が強く、建物群としての修景は意識されていないように推察される。国の重要文化財や川崎市の重要歴史記念物などが多数在り、ボランティアのガイドによる案内やガイダンス施設による常設展示によって民家に対する深い理解を促している。

⑤ 飛騨民俗村・飛騨の里（岐阜県高山市）

旧若山家住宅が 1957 年に着工した御母衣ダム建設に伴い高山市内に移築され 1959 年に「飛騨民俗館」として開館したのがきっかけである。その後 1970 年から 1971 年にかけて 11 棟（茅葺き民家 5 棟、樽葺き民家 6 棟）が松倉城跡の敷地に移築されて「飛騨の里」として開園した。その後 1998 年に旧若山家住宅が「飛騨の里」へ移築される等して、現在は合計 30 棟の建造物（うち民家は 17 棟）で構成されている。敷地は緩やかな傾斜地で下部には五阿弥池が設けられ、上部に向かって建物が配置されており、滞在時間に応じた 3 種類の順路が設定されている。また、「飛騨の里」から北東方向に約 800m 離れた場所には樽葺き民家の旧野首家があり、山岳資料館と合わせて「民俗村」と呼ばれ、さらに「飛騨の里」を合わせて「飛騨民俗村」と総称されている。

⑥ 野外博物館合掌造り民家園（岐阜県大野郡）

1969 年から 1971 年にかけて 9 棟の合掌造りの建物（現在は全て岐阜県重要文化財指定建造物）が移築され、新築された馬飼葉置場を加え 1972 年に「白川郷合掌村」として、岐阜県大野郡白川村の白川郷の合掌集落とは庄川を挟んで対岸に位置する敷地に開園した。当初から存在する 9 棟は敷地全体に分散して配置されており、それらの周辺の空きスペースを活用しながら 1982 年に歴史的な建築物が新たに 6 棟移築されるとともに、4 棟の施設が新設されて現在に至っている。園内には東西に細長い敷地の高低差を活かしながら「水織音の滝」を中央に配置することによって周辺地域の現風景も再現しており、中野長治郎家住宅は「お休み処」としても活用されている。1983 年の「白川郷合掌の里」への名称変更を経て、1994 年からは現名称の「野外博物館合掌造り民家園」となっている。

⑦ 四国民家博物館（香川県高松市）

1976 年に高松市の史跡・天然記念物屋島の指定区内に開館して以来「四国村」の愛称で親しまれており、村内は四国の各地から移築された 33 棟の建物によって構成されている。開村当初は吉野家住宅・小豆島の農村歌舞伎舞台・砂糖しめ小屋（2 棟）・こうぞ蒸小屋・中石家住宅・下木家住宅・山下家住宅・南予の茶堂「遊庵」・土佐の石蔵・久米家住宅・かずら橋だけであったが、その後も移築建物を増やしていき、1994 年には敷地が北東側に拡張されて 1998 年に江崎灯台退息所やクダコ島灯台退息所等が移築された。さらに、2002

年には「四国村ギャラリー」(設計:安藤忠雄建築研究所)が新築されて現在に至っている。敷地は緩やかな傾斜地であることから予め順路が定められており、滞在時間に応じて複数の順路が設定されているのも特徴である。建築の他にも四国の秘境祖谷のかずら橋や庵治産の石で築いた道路や広場など周辺の自然環境が巧みに取り入れられているだけでなく、流正之氏の「流れ坂」や「染が滝」も設けられている。

⑧ 福島市民家園 (福島県福島市)

福島市にあった鈴木家住宅が 1970 年に前述した川崎市立日本民家園へ移築されたのをきっかけとして当施設の構想が生まれ、1982 年に福島県福島市のあづま運動公園内の北東のエリアに開園した。園内には江戸時代中期から明治時代初期にかけて福島県北部地方に建設された 10 棟の建物が移築されている。開園当初は旧小野家・旧笥家宿店・旧奈良輪家の 3 棟のみであったが、その後段階的に建物が増えて、最終的には 1995 年に旧馬場家住宅が敷地の北東の隅に移築され現在の状態に至っている。建物は敷地中央に流れている水路に沿うように配置されており、各建物は周囲を生垣が囲んでいることから群としての修景は余り意識されていないと推察された。「民家園」という名称であるものの、芝居小屋や商人宿など様々な用途の建物も存在しており、新築の展示館には民家の軸組模型等が展示されており、建物の構造も理解出来るようになっている。建物だけでなく外部の庭や畑も当時の環境が再現されており、昔の暮らしの伝承を目的として年中行事を再現した体験学習等も行われ、積極的な活用が図られている。

⑨ 北海道開拓の村 (北海道札幌市)

明治から昭和初期にかけて建設された北海道開拓の歴史を物語る道内各地の建造物を、北海道札幌市の道立自然公園野幌森林公園の一角に集めた施設であり、当時の生活を体験的に理解することを目的として 1983 年に開村した。開園当初に移築されていた建物は 15 棟のみであったが、現在では 52 棟の建物で構成されている。敷地は約 54ha と広大で、L 字型の敷地に対して市街地・漁村・農村・山村群に分けてゾーニングされ、ゾーンごとに景観が整えられており、漁村では海を模した修景をつくるなど工夫が見られる。また、園内には馬車鉄道(冬季以外)や馬そり(冬季)が走り、移築された馬小屋を実際に同じ機能として使用している点は興味深い。

⑩ 福井市おさごえ民家園 (福井県福井市)

福井県福井市の西側にある兎越山の東麓に位置する。昭和末期に構想された大規模なプロジェクト(文化会館の建設、野外博物館の設置、公園の整備)をきっかけとして生まれた施設であり、その際に野外博物館には江戸時代中期から明治時代初期にかけて福井県内に建てられた 6 棟(古民家 5 棟と板倉 1 棟)の歴史的な建築物を移築することや、それらの配置計画が決定していた。当初は山を切り崩して造成する計画もあったが、バブル経済の崩壊によって野外博物館の設置と公園の整備のみが実現し 1989 年に開園した。建物の棟数は当初より 6 棟のみに限られ、建物の移築工事は 2 期に分けて実施されていた。1 期工事(1985 年完了)では旧蓑輪家住宅・旧梅田家住宅・旧山下家板倉が、2 期工事(1989 年完了)では旧城地家住宅・旧岡本家住宅・旧土屋家住宅がそれぞれ移築され、現状の入口とは別に東寄りに仮の入口を設けて 1 期工事の完了後に暫定的に開園した。

⑪ 江戸東京たてもの園（東京都小金井市）

江戸東京博物館の分館として1993年に約74haある都立小金井公園内の西側の一角に開園した。開園当初は12棟であったが、現在では30棟の建物が移築されている。開園以前は1954年の小金井公園開園と同時に武蔵野郷土館が設置されていたが1991年に閉園し、移築建物を含め所蔵品等は全て江戸東京たてもの園に移管されている。また、現在はビジターセンターとして利用されている建物は、紀元二千六百年記念式典の会場として皇居外苑に造営された光華殿を1941年に移築したもので、武蔵野郷土館の所蔵品を引き継ぐかたちで開園している。当園は東京（江戸）に建設されていた建物を凍結保存して当時の様子を再現しながら、建物の配置を再構成して展示する方法を用いたゾーニングによる展示が興味深い点である。園内は西ゾーン・東ゾーン・センターゾーンの3つに分けてゾーニングされ、西ゾーンは武蔵野の農村や山の手の住宅、東ゾーンは下町の商店や商家、センターゾーンはビジターセンター（旧光華殿）や高橋是清邸、旧自証院霊屋などが建ち並ぶ格式の高いエリアとなっている。

⑫ いわき市暮らしの伝承館（福島県いわき市）

先人達が暮らしの中で培い伝承してきた知恵や技術・風習など、体験を通じて気軽に学習できる施設を目的として1999年に福島県いわき市の県営いわき公園内に開園し、施設は展示室や事務室がある学習管理棟と民家ゾーンから構成されている。民家ゾーンには江戸時代後期から明治時代初期にかけて現在のいわき市内に建設された5棟の伝統的な民家が移築されており、古民家の中には自由に上がって見学することも可能である。限定された地域から建物を集めているのも特徴の1つで、開園当初から建物の数は変わっていない。配置は旧川口家・旧猪狩家・旧高木家の3棟によって構成された敷地東側の平野部の集落ゾーンと、旧樋口家・旧芳賀家の2棟によって構成された敷地西側の山間部の集落ゾーンに大きく分かれており、それぞれが群としての景観を意識したゾーニングとなっている。また、それぞれの建物の前面には畑や水田など当時の外部の環境が再現されるだけでなく、ボランティア活動によって実際に農作物の栽培が行われており、敷地の東側のエリアには「お祭り広場」と名付けられた広場が設けられ各種のイベントで活用されている。

■ まとめ

12施設を俯瞰すると、開館した時期が早い施設は全国から建物を移築し、その後の施設は限定した地域から建物を移築している傾向があることが分かった。そこで、各施設について移築された建物の移築前の所在地に着目して考察した。その結果、全国から建物を移築している施設は配置計画に関する全体のマスタープランのようなものは存在せず、移築する際その時点での最善の配置計画を検討していたことが分かった。一方、限定した地域から建物を移築している施設は、移築前に存在していた集落としての景観を再現するなど建物を群として捉えた配置計画がなされ、建物を展示するだけではなく、その地域の歴史や文化を紹介する施設も多く見られた。また、「⑫いわき市暮らしの伝承館」以外は開館当初のままの棟数ではなく、開館後に段階的に建物の数を増やして施設を拡大してきたことが分かった。さらに、21世紀に入ってから移築された建物の数は激減しており、近年では移築による施設の拡大から施設の維持管理に重点を置いて運営されている時期に入っていると考えられる。

初期の野外博物館は解体の危機に瀕した緊急性の高い建物を保存する目的の施設であったが、その後の施設は建物に加えて当時の生活や培われてきた文化を継承する役割も加味され地域に根差した施設であると考えられる。このことは当初は建物の保存が主目的であった移築保存が、生活や文化を継承する可能性を持つ点で、その意義の拡がりにつながったと言えるであろう。

表 1 全国文化財集落施設協議会に加盟している野外博物館の概要一覧（2018 年現在）

No	施設名	所在地	開館年	建物数		敷地面積 (現状)	管理運営 (現状)	年間来園人数 (2018 年度)
				(開園時)	(現状)			
1	三溪園	神奈川県 横浜市	1906	2	17	約 175,000 m ²	(公益財団法人) 三溪園保勝会	399,521 人
2	日本民家集落 博物館	大阪府 豊中市	1960	4	13	約 36,000 m ²	(公益財団法人) 大阪府文化財センター	33,427 人
3	博物館明治村	愛知県 犬山市	1965	15	64	約 1,000,000 m ²	(公益財団法人) 明治村	524,138 人
4	川崎市立 日本民家園	神奈川県 川崎市	1967	3	25	約 30,000 m ²	川崎市	116,772 人
5	飛騨民俗村 飛騨の里	岐阜県 高山市	1971	11	30	約 130,000 m ²	(有限会社) トータルプランニング オフィス飛騨	152,717 人
6	野外博物館 合掌造り民家園	岐阜県 大野郡	1972	9	15	約 58,000 m ²	(一般財団法人) 白川村緑地資源 開発公社	94,896 人
7	四国民家博物館	香川県 高松市	1976	12	31	約 50,000 m ²	(公益財団法人) 四国民家博物館	41,920 人
8	福島市民家園	福島県 福島市	1982	3	10	約 110,000 m ²	(公益財団法人) 福島県都市公園・ 緑化協会	35,875 人
9	北海道開拓の村	北海道 札幌市	1983	15	52	約 542,000 m ²	(一般財団法人) 北海道歴史文化財団	140,959 人
10	福井市おさごえ 民家園	福井県 福井市	1989	3	6	約 8,000 m ²	福井市	約 8,600 人
11	江戸東京 たてももの園	東京都 小金井市	1993	12	30	約 70,000 m ²	(公益財団法人) 東京都歴史文化財団	256,202 人
12	いわき市 暮らしの伝承館	福島県 いわき市	1999	5	5	約 47,500 m ²	(公益財団法人) いわき市教育文化 事業団	22,424 人

謝辞

本研究に関する調査に際しては、各施設の管理者に多大なるご協力をいただいた。ここに感謝の意を表す。

(発 表 論 文)

小林広樹，大内田史郎，小林直弘：「全国の野外博物館の変遷に関する研究～全国文化財集落施設協議会を対象として～」，2020 年度日本建築学会大会学術講演梗概集（2020 年 9 月発表予定）